

りれ一随筆⁷⁹

北里大学看護学部

鳥袋香子

前々回のりれ一随筆を担当した長南記志子さんから「池奥千代美さんにバトンタッチしたいから連絡先をおしえて」と言われ、ホイホイおしえて1か月後、次の責任を取りなさいと池奥さんから電話がかかってきてしまいました。話のついでに近況報告となり、あいかわらずバイタリティーあふれる池奥さんの活躍に感心するばかりの私です。

10月のICM大会での再会を約束したものの当日はたいへんな人波で、あきらめかけていた頃、昔とちっとも変わらない彼女に会うことができました。

彼女と私は同じ年なのですが、助産婦として実社会にでたのは、彼女の方がずっと早く、北里大学病院と一緒に勤務していた頃は、先輩である彼女の足手まといにならないよう必死だった自分が思いだされます。

学生の頃

私は、琉球大学保健学部保健学科で助産婦になるための教育を受けました。その頃、琉球大学で助産婦になるための単位を取得するには半年間卒業を延期しなければならず、その時期がくると、助産コースを選択するかどうか迷う人もいました。

私自身は、助産コースを選択したいと3年生の頃より思っていました。その動機は、母子保健学の授業がおもしろく、興味をそそられたからという程度のものでした。

助産実習に入ってから、体力的にも精神的にもハードなものがありましたが、病棟の助産婦には大学の先輩も多く、先生方も最新の医療について熱心におしえて下さり、産直時に遭遇する事例には興味が尽きませんでした。

南の果てから本土に就職した私がカルチャーショックを受けることが少なかったのは、この時の体験が支えになっていたと今でも感謝して

います。

本土への就職

大学を卒業し、就職先に神奈川県にある北里大学病院を選んだのは、生まれてこのかた旅行以外では沖縄を出たことがなかったのと、どうせなら周産期医療の経験ができるところでという漠然とした理由からでした。

これ程漠然と助産婦になった私が、助産婦という仕事の魅力にどっぷりとつかり、こうして後輩の育成にあたることになったのは、当時産科棟と一緒に勤務していた同僚や池奥さんのような先輩達からの触発によるものが大きかったと思います。

私が就職していちばんびっくりしたことは、婦長をはじめとするスタッフの若さと助産婦としてのプライドの高さです。このプライドが、日々の業務における教育的指導によるものであることなど、その頃の私には知るよしもありませんでした。

分娩数も多く、ハイリスク妊婦の多い大学病院での看護ケアには、高度な医療知識や判断力が要求されます。どんな状況であっても、助産婦である私の判断が問われます。結果だけでなくその過程が問われる毎日なのです。

しかも、私が問われたことの多くは、妊婦が

助産婦さん、覚悟はありますか

ことにいたった妊婦を受け持ったのですが、受け持っていた時は、発育不全はみられるものの明らかな異常を指摘するだけの検査所見が得られない状態が続いていました。妊婦の不安を軽減するだけの資料もなく、前回と同様の児が生まれたらどうするか、方向性が見出せずにいたのです。

しかし、プライマリ・カンファレンスにおいて、当時の母性・小児系科長から「ここまでできたら産むしかないでしょう」という意見をもらったことをきっかけに、検査結果がはっきりしていないからと、この問題から逃げていた自分に気づかされたのでした。

大切なことは、どんな児が生まれようと、妊婦がそれを受けとめ対処していけるよう援助していくことです。それは、助産婦である私が、妊婦がどんな状況になってもかかわっていく覚悟さえすればよいことなのです。

これは、助産婦としては、あたりまえのことではありますが、かなり厳しいことでもあります。経験して思うのですが、自分の人間性を問われる場面に必ず直面し、自己嫌悪に陥ってしまうことが度々あるからです。

でも、それを乗り越えないことには助産婦としての自立はありえないと思っています。

それ以来、私はなにかあると多少開き直りぎみではありますが、自分に問うことにしています。覚悟はよろしいですかと。

ICM 大会に参加した直後に書いたせいか、なんだかやけに肩に力が入った文になってしまいました。

* * *

今回は、私とは対照的に琉球大学医学部付属病院に残り、同級生の中で一番はじめに結婚し、一番はじめに出産を体験し、なおかつ、臨床で助産婦を続けてきた儀間継子さんにバトンタッチします。

必要としていることにどの程度応えられたのか、妊婦の側にたった医師へのコンサルテーションがなされたかということでした。ともすれば忘れてしまいがちな日常生活行動への援助の大切さを問われたのもこの頃です。こうした毎日は、知識と経験の乏しい私には、かなりの緊張をしいられる日々でした。

しかし、この経験は、後になってプライマリ・ナースのトライアルをすることになった時、かなり活かされていたと思います。

勤務中はきびしい諸先輩方も、業務が終ればやさしいお姉さんに変身します。食事にみんなででかけたり、遊びにつれていってくれたり、夜勤の時の差し入れなど、だれからということなくあったりするのです。

落ちこんでいる時は励まされたり、貴重なアドバイスを受けることも度々ありました。この時得たことは、勉強会などで得たことよりも長く頭と心に残っています。

助産婦としての自立

助産婦としての職務に少しずつめざめてきた私でしたが、プライマリ・ナースを経験したことは、助産婦としての自分をさらに見直す機会となりました。

私は、32週で軟骨形成不全の児を出産する